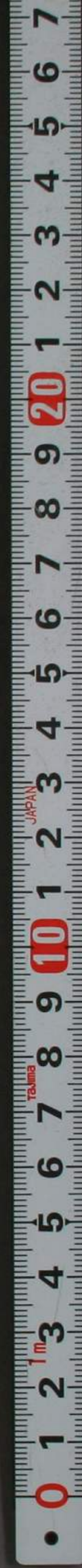


重修真書太閤記

六編

六

13
459
56



へ13 特
門 459
巻 56

消
福
兼

重修真書太閤記六編卷之十六

宇野諫言誠實の事

并明智孫十郎宇野を討事

去程さつり不明ふみょう智日向守ちひなけハ宇野うの豊後守ぶんご小密謀せうみつを語かた又一方の大
將しやうと頼たの三さん一いつに宇野うのをこれこれを諫いさめ今宵こんしやうを路次ろじの勞つれをいた
そりそり玉たまへ明日あしたふん登城とんじやう一いつこ中なかやかよ是これをそかへ
とて退たい出しゆしけきハ光秀あきひで案あん相違さうい一いつ如何いかふせよ一いつと元もとの
座ざを立たせせ以もつ大息おほいき繼つぎ居ゐたる処ところは只今ただいままで宇野うの豊後守ぶんご
か居ゐたるかへへの數奇屋たすかやの襖ふすまを開ひらき光秀あきひでハ日頃ひんげん秘藏ひそくせ
一いつ小筒こつつをもち出で光秀あきひで側わきまさまさ一いつ置おき誰たれふらあらんとよ

同
會
攻
印

大問記六編卷之十六

く見れハ明智孫十郎光景なり抑この小筒ハ火繩を用ひ
て燈落しうちぬり長ささつあ六七寸袖のうちあて用
小へし是を光秀若年の時武者修行して諸國を遍歴ける
時大隅の國熊毛郡種子島の赤尾木と云処ふて不思議ふ
得たる筒なり南蠻人牟羅叔舎の銘あり光秀元より炮術
の妙を得たししかとみ殊更に秘藏して片時もかたそ
をそふく叔舎の筒と稱しあはさふとみ愛翫しこの筒
を孫十郎り持出しを何ある故そといふそしめ宇野を
招き一時万一大事をうち明し後宇野り心は光秀を討て
信長又勲功を申さんと思ふまゝさふもあらは宇野を聞
ふる武邊者ぬり光秀と只二人さし向ひてあまりふ打と

けんも心ふしと思ふよより孫十郎をささや小隠し置は
るく然るふ宇野を光秀か云はる詞をおしかへし心短き
そあり事と諫め止めしものぬふを其終に放ち返し給ひ
しを餘も小穩便ふ御所置かふと竊に不審し奉るたし
某とて小御門葉ふハ連ふりゆへ共かゝる大事を伺はて
も他言仕るまゝさふものと思召れて仰付られしを思へ
を我身ふからいと惜きものぬふを去ぬからいたた御
家老たちさへ存知不し正を某もれて伺ひ知ハ早御暇を
給ふふへしと言ひし腰刀ををらと引抜きてまかうよと
見へし時光秀をし里よりさく腕を取てきたらせ汝
誠心金鍔の如しとさくより知たる故に今宵の要事を

言付たり但々ふち互に夢中の夢想とおひかへーとは言
もの、某實ふ誤てり汝これを捕ふへき策ありやと云ハ
孫十郎疾より工夫仕りゆとや志りハ光秀大左文字の刀
を取て孫十郎ふ與ふ是を希代の切ものおて二尺八寸志
のき弘くかさね厚し元を京都將軍の御物たりーを義昭
卿より光秀お給りー刀ありさらてだよ心よこめーと
然るおかる名作を得ー上ハをこーもをやく切あちを試
たーとおひへいせり夥くあゝあゝと取ーゆめ畏ゆと
いふより早く龜山より間道をまはり宇野り住ある卯川
をさーて急きゆく豊後守ハ光秀おまねかれて腕のい
をーのひ川、龜山よりいり荒すー謀叛の次第をさく

然るへからはと深切不利害をときて大方を説課をーと
おもひ川をいよく心を静めて堪忍の二字をたもち玉
へやと意見をのへさかへ王道然ーも光秀かあく計あさ
き謀叛を思ひ川心のうちのかいさけりお我を
昔ふーこそれ故彼も一方の大將おふと云然らん我又古
き好を思ふよより事を分て異見ー川るを大かさ得
心せーと見ゆれとも人の疑心のふあけれハ我を跡より
追もやせん本道を夜ふけて行ハ無念あり若き昔のうさ
死がりふれー山道のと然れハ腕のいたを忍つ、おゆ
る小路の細けきハ木の下闇をゆるくとたど望ありらも
筋骨のひくさにいとこはよけきハあゝよ休らひかーこ

おたくまを名供を帰して照もち迎ひをあくるこくせよ
 といひやるまはさそけきと我身の果と知されいせめ
 一歩もまゝまをよとあむむむりふの人影を山たちふれ
 やあやーやと見り伺ひ誰なるや名乗といへる其人も
 同く此方をまわしてきてさ宣ふを宇野殿り御邊ハ明智
 孫十郎今頃まを何の用とまぬ体にて問ひて心
 うちお光秀り我をうたひ此ものを追手おあけり討を
 んとエーものと早知もちと油断をささはお返辞ふ
 ようてまもわくも振舞ふへられと思案を定め身のまへ
 走るとハ心も付は孫十郎ハおのれ豊後めよくおそまふ
 来あひつれいゝ打を好さんと思へとも道のかつての悪

け色ハま川よきかとおと答ふる様某を坂本よりの歸り
 足馬路の中川より談むる用事をうけ存の外は隙とりて
 餘り暑の苦さを表し避るとせよかと又日を早晚天
 子及びハハ保津の里ふ知由あれと明日まで待れぬ要
 事かれをかく夜をこめて罷り通る宇野殿ハ只今何
 の御游興まぶしの鹿を待るふりさりとてお御壯くそ
 寝れハ豊後心よさても此者光秀けふ某を呼ひるまを
 ぬるるへしさまれハ刺客と思それる但馬路の中川へと
 いひし是も同一筋あらめさて苦くハの振舞やと頻り
 疑ひ思へとも問きて答へぬ法もあささらハ有の依に
 いえんとてのお明智との事ハ殿の名をまふまより

腫物の痛を堪川、龜山は罷上り只今かへる処なり御邊
 外へ廻らると承りぬ我等如きの足おへよ此の如ひ
 早く早行玉へと進むれハ孫十郎然らハ御免を蒙りてと
 行違ひさぬ抜打ハ豊後守り肩さきふりく切こむを豊後
 少も臆を以左知ると抜合を横お拂へハ飛上る孫十
 郎袴の皮を三寸をりり切落をされとも明智ハ年若く
 豊後ハ老たり左の腕を打落され今ハかひぬ一日向守我
 を疑ひ其方お追かけさせるとおろえたり但一大事を聞
 くととも他へ洩れへず宇野あり以それを見しらぬ心よ
 て左程の大事を思ひたつち誠お石をいりきて淵入薪
 を負て焼野を過るなからん跡おて日州を弔ふ人を我

あつて誰りハあくと傳へよといふ言の葉も次第ふよ
 はるをものともせ以留を差て一息つきたたうと見れハ宇
 野侍照を取て走里よりこれお主人を討れりそおふ
 退ると聲かけて明智ハ眉間を心さしつと切を引を
 つ一二川おかれとおりと打刀ハ例の大左文字手おたへ
 もせ以左右へをつと倒きり孫十郎ハ首尾よりと刀を
 打り篤と見えいりさぬ聞ふる大ささものを人を切音
 もせ以誠お水をさく如いあれ刀や名物やと獨おめつ
 かたへを見れハ馬頭観音たち多小孫十郎ハからくと
 笑ひ川聞見人ふとおひしし知ぬ顔する顔ふくき
 いづもの見せんと言わから微塵おふれと切こめいもつ

と光里をみてども御像ハ二川又切られ今の世まで
も明智運をため一の観音と山に立寄孫十郎龜山よ
かへり泣けハ夜ハ既ハ曉ちり光秀ハ例のまきや只
一人安否を待て居たり一か孫十郎と見るよりも首尾能
せ一骨折と聲をあけ川に褒美して何事も明ての後と
示一あひ奥と表へ引り終

天正十年五月廿七日光秀坂本入廿八日愛宕山よ一
宿一廿九日龜山よかへり此夜宇野豊後守を討果一明
色ハ六月一日丁亥軍評定と知へ一

龜山城にて大望手開きの事
并軍勢手配を定むる事

明智日向守光秀まよハ丹波國桑田郡宇津ハ村の内明石
村よ生於始ハ明石十兵衛といふ其父ハ美濃國の土岐の
明智おれハ後ハ明智と改め一くされハ信長公を勧めて
丹波國を討せ案内知たるをねれハ黒井鹿集余田ハ木関
出雲宇津餘戸杉馬路ハ鹿部伯々下部井上高山笹山横山
何れも一四五日又ハ半月一月よ攻落けるか餘戸の福
井因幡守定政を攻破てハ光秀餘戸よ住て處々へ手遣ふ
一ハ横山ハ丹後へ近一とて明智弥平次を入置城をは
福知山と改めけり宇津ハ光秀か出生の地おれをとて城
をは暫時ふ是を攻落一餘戸と合せて龜山の城を修した
るなり

一書小綾戸の福井定政と記さる綾戸ハ何鹿郡餘戸ハ
氷上多紀船井何鹿の郡有龜山の地元丸山岡山と
云一とも又ハ丸岡山といひ一とも云光秀當城を築
終て一山崎の破れ及ふとや或云當城ハ内堀
一地次第ハ高一喰違高堀など見ゆる光秀の居間とて
六帖敷四方椽なり此椽の下の縁石二尺計も有と云
天守より四方二三里の間ハ脚下みらる明智門と
云名も存光秀天正四年入國より五年六年七月お至
りて城大方成就せりと云奉行ハ山田又兵衛野口彦
助なり

明きハ六月一日龜山の城の大廣間諸士を呼集ける其

人々誰々持ま川一番ハ明智左馬助光俊元ハ美濃國の
住人三宅弥平次といひ一ハ光秀名字をさつて明智と
改め一ハ二番ハ明智十郎左衛門光秋是ハ光秀ハ從弟ハ
て丸馬助の妹婿なり三番ハ明智清右衛門光忠これハ光
秀ハ又從弟ハ一ハ光秀の二女の婿なり四番ハ妻木主水
正範方光秀實方の舎弟なり五番ハ三宅藤兵衛六番ハ溝
尾庄兵衛茂朝此人光秀ハ能似たりとて時々見あやまり
一人あり一ハ七番ハ明石義大夫忠益八番ハ明智孫十郎光
景九番ハ齋藤内蔵助利三是ハ光秀妻の弟なり
國花万葉記山城國卷ハ云真如堂鈴聲山極樂寺ハ齋藤
内蔵助利三塔有法名忘諦利三大津ハ自殺一けるを

當寺中東養坊是を葬送一けると之羽柴筑前守堀出
て粟田口梟たり一を再度東養坊盜取て塚を築一と云
江州志賀郡の内ふて五千石を領一けるか後ふハ丹波國
氷上郡春日井の猪口山の城主なり

丹波國氷上郡春日井莊黒井の北ふ當王枝林山誓願寺
と云浄土宗あり是利三開基あり然るふ今ハ大梅山興
禪寺と改む此地則ち猪口山ありと云

元ハ齋藤持是院法印妙椿の一族あれとも其力微ふ一て
勢敵一たけれハ心なく道三よ從ひるより一ハ明智と
親一くあり一ふそふ遂ふ一城のぬ一ともあり一也
十番四方田但馬守政孝武藏國の兒玉黨莊の左衛門尉弘

長り後亂ふ一て丹波國福智山の城主あり世ハ四王天と
書るハ誤あり十一番村上和泉守清國十二番奥田宮内景
廣十三番荒木山城守行重

丹波國篠山の城主荒木民部大輔の一族あり荒木ハ波
多野の一族あり一ハ光秀と軍一て終よ打負播州へ落
行一あり

十四番並河掃部助易家十五番池田織部正十六番今峯頼
母十七番久我三左衛門十八番三枝三左衛門十九番安福
宇右衛門廿番藤田傳吾廿一番村越三十郎廿二番内藤三
郎次廿三番木村次郎左衛門廿四番並河金右衛門廿五番
中村次郎兵衛廿六番村井又兵衛廿七番箕浦大藏廿八番

藤田九兵衛廿九番安田作兵衛國次卅番比田帶刀則家卅一
番進士六郎大夫貞則卅二番加治石見守卅三番山本山入
卅四番伯々下部權頭貞次卅五番中澤造酒助卅六番尾子
與三卅七番松田太郎左衛門卅八番柴田源左衛門卅九番
伊勢安房守四十番久徳六左衛門四十一番後藤庄三郎光
次四十二番阿閑淡路守四十三番上野筑前守四十四番多
賀新左衛門四十五番伊東志摩守四十六番鳥山主殿助四
十七番杉原讚岐守四十八番古田權之助四十九番磯野彈
正五十番松本主膳五十一番逸見奎允五十二番平田六郎
次郎五十三番香川刑部五十四番渥美隱岐守五十五番畑
田主馬五十六番高橋席之助五十七番櫻井新五左衛門五

十八番福岡十大夫五十九番五十嵐源八六十番萩原彦兵
衛六十一番酒井孫左衛門六十二番和田奎允六十三番堀
三之丞六十四番隱岐内膳六十五番関田太郎八十六番
三宅孫十郎六十七番諏方飛驒守六十八番番頭大炊助を
始と一々江州丹州の侍とも我もくそそ廿集る此外年來
の舊交またハ炮術兵法の門人多けきとも是等をハかた
らを以床ニ打蛇昆布搗栗硯箱巻紙を置りや、ありて光
秀出座一面く出仕の条満足せり抑光秀今度毛利討手の
加勢を蒙り明二日早天ニ首途をへ一然らハ何れも光秀
り為ニ命をまてんとおもふ所人ハ此巻紙ニ姓名を記
されぬへも一まゝ命おしくおもふ所人ハこれより退

出あるへ一光秀さら又恨ととを以て云一時四座黙然と
して詞を發するものふ一爰又明智左馬助進三いてく
けるハ命をハ疾より君ふ奉る其外ハ捨へる命ありされ共
姓名考るると仰らるるをいふと云さんを川も好し去
りら万一二心もやと思召さる故ハ尤も宣ひいささ
るあるへ一然ハ誓紙を以て中へ一とて篠村ハ幡宮の午
王の裏ハ罰文記して姓名を認め判形一身血をそくいて
差出以是を始として六十餘人の川れハ劣ら以後を姓
名を書きハ血を替くべき次第くハ循一けるを隱岐内膳請
取光秀り前ハけハ光秀とて一覽一三度いたくさ
箱ハ収めて床に置うち蛇とちちるるを一川又取て昆布

小巻て銘くふこれを引光秀西國討手のため下向仕る
勲功ハ寄て出雲石見の二國を賜る里一ハ其國ハいまた
入部を以てあすつさへ住かれ一坂本城並ハこの丹波の國
をハ台上げられたれハ今日限里の此國好り名残の酒宴ハ
ハハ面も一獻をこして然るへ一とてやうて酒樽を
かき出さる
流布本爰ハて謀叛のよ一を告るさあり誤り因て改
正
日也既ハ西ハゆたふくころ能生畑ハ打て出て水色ハ枯
梗ハ紋染たる九本旗をせ一たさる
能生畑今ハ穢多村とある龜山より十五町許もあるへ

一廣道と篠村の間也と云今加勢野又ハ合戦野と云
大手ハ明智左馬助を大將おて三千五百余騎本道を經へ
往ゆの里らハ打出る一手ハ明智十郎右衛門を大將おて四千
余騎王子村の内三軒屋けんやと云処より北手の山へ操ありて越こ
ハ松尾へ出る也是ハ明智の家老の越こたる道みちありとて家
老越こと後のちく入いりよひひここ日向守ひハ二千余騎保津の里
より山中なかふかく里水尾みづのしの山陵さんりやうを余よ所しふ見みる清滝きよたきの川が
渡わたり愛宕あいだうの麓ふもとの鳥居とりいの前まへへ出い嵯峨野さあまののを死しささて衣笠えがさの山
のかたへ陣ちんをとる

重修真書太閤記六編卷之十六終

重修真書太閤記六編卷之十七

織田信長公二十五悪の事

并寄手本能寺を取巻事

織田を右大臣信長公永禄十一年七月廿五日足利義昭君を
濃州立正寺なるせうじへ迎むかへ奉ほう里廿七日をしめて拜謁まいえつし九月七日
岐阜きふを發足はつそくすし一い廿八日入浴いりよくし勝龍寺しょうりゆうじ芥川かいは小清水池こしみずいけ
田等たらうの城しろを攻落せめおちし十月十八日義昭君を征夷大將軍と
あし奉ほう里志しの將軍しやうぐんより御感狀ごかんじやうを桐引きりひき両筋りやうしんの御紋ごもんを下
さ給御使たまはハ細川兵部大輔藤孝ふぢたか和田伊賀守惟政ゐだのいげしゆゐせいあり其後
天正元年五月六日義昭將軍と山城の宇治槇の島うぢのしまへ於おて

大開記六編卷之十七

戦を挑ましむとも將軍方勢のきり折あるは將軍河州へ
退去せしめしをれより紀伊國へ御開き所々流浪の後備
後國鞆津へ御船を寄られ毛利家を御頼まありける不輝
元朝臣元春隆景と共に馳走ありしともたゞ寒温を過
させぬふそわりぬれいづ都へ歸らざるんとも見え
は老ゆしより後ハ信長京ありて天子を奉さる武將
よりゆきり天下兵馬の權を執て江州安土に住し今年天正
十年に至りて既十年位を正二位官を右大臣に陞る関
東の氏康関西の元就さては甲斐の信玄越後の謙信おと
いふ良將を泉下人とありしとも武威虎の如く風よ
從ふて四方を拂ひ軍令龍の如く雲を起して八隅不及ふ

えたりし布武天下の印虚しからば天下泰平織田家の掌
握ふ婦せんとせし天道をておを關の理もや父子日を
同一くして傷害せしゆに抑信長公の事蹟を考ふるふ一
お松永を以て毒殺を行はしめ將軍及び主の三好を殺さ
しむ

流布本を斯の如し但松永久秀の權を執るしめ老ハ
天文廿一年義輝將軍の御時ふして信長十九歳の時也
久秀桐御紋を主の三好義長と共に賜りしハ永祿元
年二月朔日の事なり義輝將軍を弑したるハ永祿八年
五月十九日の事にて老て信長美濃國と合戦の間なり又
主の三好義興を毒殺せしハ永祿六年八月廿五日なり

共ニ信長の與也如トにあらは
二小浅井朝倉ヲ首級を盃ニ造る三小万福丸を串刺シ以
天正元年八月廿日義景自殺廿九日長政自殺万福丸ハ
長政の嫡子也一々信長姪也

四小泉州堺の妙國寺の蘇鐵并小什物空蟬の茶杓を強て
所望一其事小依て住持日珖を惡之如五小石山本願寺
の地を乞ひ一與えざるを憤て軍を起以六小長島
一揆小負一を悔之欺きて腹を入鉄炮を以て是をある
七小日蓮衆を以て叡山攻の先鋒たらしめ一八小日蓮衆宗
意を述之命小從也此を憤て安土論の日日蓮宗を負
と定む八小叡山を焼九小平蜘蛛の壺のと小よりて松永を

怒り終ニ松永ニ叛逆を起させ是を滅す十小荒木村重の親
族の無罪者を殺す十一小妖僧無邊を斬て我意を振ふ十
二小天正八年七月本願寺と和して紀州ニ移一途中一
てこれを殺さんとする十三小佐久間信盛父子の旧功
を以て高野山ニ追放す十四小林佐渡守を責る小廿年前
の過をあけ十五小安藤伊賀守を配流する小數年前の
を擧る十六小武田勝頼の首小向て惡口以十七小荒木村重
ヲ妻子百廿人を尾崎七本松ニ磔以十八小連歌師紹巴
心を奪ひ脇向を自分以て付義昭將軍を蔑如するの意を
顯す以十九小伊丹浪人高野山ニ隱一置よ一を聞て高野
山の聖三百廿人を殺以廿小森勝兵衛信州海津一揆の首

三千を送りてを悦び感状を與ふ廿一は紀州鷲の森の光
佐上人を襲ふ廿二は明智光秀の顔を討ふと一度人々
討るると二度廿三は近衛関白前久公東山道を上りて
時同道一奉らざるこ

近衛前久公ハ植家公の嫡男なり永祿二年十月関東へ
下向す一は三年九月十五日越後へ下向四年十二月
十六日奥州へ下向五年飯沼此間の事り不審天正六年
准三宮十年太政大臣お任し玉ふ

廿四小丹波の波多野兄弟を殺し廿五小波天連を信仰し
て其災を後世よのこは是なりハ、非道の事あまはさ
そ重恩の光秀も叛心を起しなり信長十三歳元服して

三郎信長と称尾張國古渡の城に住其時父信秀より付
られハ林新五郎平手中務少輔青山與惣左衛門内藤勝
助四人なり新五郎ハ即佐渡守也平手ハ信長の不行義を
諫む自殺し林ハのこりて補佐の力を盡し一は却てこれ
を流罪せられ知行を召放たふ父より付られ一補佐の老
臣たに如斯いせんや我身の取立し者み於ておや甲斐の
武田を滅し上洛の時石山寺ぬのりて觀音の像を
見よふと前代未聞の所行なり

近江國輿地志畧小石山ハ石光山石山寺と云聖武天皇
の御宇金鷲仙人建立云云本堂本尊如意輪觀音長六寸
廣戸皇子の御持佛今丈六佛の胸間ハ藏む興正菩薩の

作^さりて人皆丈六の佛像の之を知て胸間ふ本尊ある
之を知^らる

然れとも英雄豪傑の之知れハ善事も少ふから尾
州名護屋小瑞雲山政秀寺を建立して平手中務を追崇し
功菴宗忠の墓を修め道^ち於^き処^に道を開き橋^を於^き処^に橋
を渡^り往來の貴賤を助け丹羽氏の家臣た^らば溝口を取
立孝子小貨をあたへ禁裏の御築地を修め兵庫の監使
の私欲を正し首代金を收めて橋の修理料と^は鳥目三千
貫を伊勢の神宮に奉りて絶^える三百餘年及ふ正廷宮を
經營^して

天正十二年の頃大和國めて三千貫と米四千五百石を

買へ一四千五百石ハ今の四千三百廿石也四斗入一万
八百表^{なり}

又京中の地子錢を免許ありその證文ふ

定

- 一 京中地子錢永代令赦免畢若從公家寺社方地子錢之
内收納有來之方ハ相計以替地可致沙汰事
- 一 諸役免許事
- 一 鰥寡孤獨之者見計ひ扶持方可令下行事
- 一 天下一之号取者何道テモ大切あると^は但京中諸名
人として内評議有て可相定事
- 一 儒道之学心^を碎^り國家正サント深く志を^をけ^り者或ハ

忠孝烈のもの尤大切あると云ふ條下行等於他異可
相計之其器之廣狹能尋問可告知之事

右之條く相計可付者

元龜四年七月七日

信長

村井長門守との

これハ義昭將軍京都を退去ありて宇治槇島ハ入御信長
ハ妙覺寺におまゝ海しける時の正にして村井ハ京の所
司代形りされとも善事を小しして悪事ハ大形り然も天
正十年六月朔日信長公ハ本能寺を以て本陣とふし玉ひ
本能寺ハ六角の南小して錦小路の北なり東ハ西洞院
西ハ油小路南北八十四丈東西四十丈の地形り今ハ本

能寺町と云これあり

三位中將信忠卿ハ妙覺寺におまゝ今日式日の禮と
て本能寺ハ入御ありて暫く御對顔御物語の後還御あり
けるか夕川あり又暑氣の御伺として入御初夜のところま
て御樽ひらかれては盃まいらせられ亥のそしめお還
御あるこれを父子一生の別れの酒宴と後おそ人を語
あふ右大臣殿ハそのまゝ奥へ入らせらるひは寢ある近習
の面々い川まもくひるの暑さに堪めて夜ハ長くしき
池の風不る醉心地は眩をすけ眠るとふし夢結ふ折し
もひびく人定の鐘は右府を枕をそなたて誰りあるくと
名を多へハ御次をへたて伏せる蘭丸おさ上りは襖ち

りくわーこまり蘭丸ゆと言上は右府ハ例の大音みてい
りふ蘭丸あの物音ハ正しくあまこの軍兵の寄るひくき
と覺えたり物見せよと仰らる蘭丸其まゝ走て出高欄ふ
足踏のけ延上見れともいませ夜深あり物のあいろハ
見えハあそ然共聞ある人馬の音蘭丸聲をより上り上様
の座所近一何ものあるぞとのけしれと静まるけしき
も見えされハあそ不審と雲透見れハ桔梗の九本旗を
ハ比參あれ光秀めと云さぬ奥へ立還る向ふまを川くそ
信長公長刀かひこま立身ハ明智め謀叛と言上をれハ然
ハ最期の軍とん老そ一防矢射て敵を入た川と宣ひも
そて比弓と矢取て出る蘭丸怒りてふお足音板の間を

そあくこ川とふとあらそは宵寐の夢をさよされて眼を
まろく立出る蘭丸十文字の鏡をつとりおどり出て猶大
ねあり一人を驚かす一め馳まはる
右大臣殿弓勢を顯す一お事
并双方の勇士大に戦ふ事
右大臣信長公ハ白綾の單衣ふ二重の丸帯前みて結ひ大
箭を取て五人張若け藤の弓ふ打くそせ庭上を見ゆへハ
早光秀ハ先鋒の兵士總門を越そこたれいる殘燈ま消
花殿上ハおろろ明からも庭のおもハまだ分のくらさ村
雲の花さ間くお見ゆへハそや矢くらまて進そくるを急
度見をひいらよ光秀ハ何くお居せ汝等ハ赤のりの我を

見しるや此矢ひとつ賜するを其途の旅もちてゆき右大臣殿の矢さきにやうし者ゆと闇魔の廳の許させよと呼せらせひ弦をと高く切てをたせりハあやまたは先進し明智の兵士五六人矢ふる射伏すハ弓勢ふ恐れて近ゆくものも射しそゆくをるすにふめくと明ゆく空を見とせはおほ大旗小旗のをしれは関の聲を上げて責寄る追手ハ六角油小路わらめてハ錦の小路西洞院十重るさ重ふ取まきたれハ遁れつへさたも射し

嗟峨天龍寺慈濟院舊記ハ惟任日向守光秀天龍寺大門の前は馬をとめ大さた多草袋を門内ふ投入さ通りとくその草袋ハ沙金多く入るあり且光秀自筆ハ後

の事を頼むよしを記して有しと云里又陰徳太平記ハ光秀ハ兵桂川に打臨む爰ハ村井春長軒り家人たりし者大井川の前と里ハ畊頭して居たりけるハ光秀ハ勢西國へ下ら直し浴中へ打入ありさるよに不審ハ思ひけれハ急し使を以て光秀ハ軍兵とも西國へ向を以浴中さして打入いりさぬ光秀ハ逆意を企るハとおふえハ用心にゆ得と告たりけれと聞か何と云今何者ハ我君ハ向さ矢を放けへさ殊ハ光秀ハ御厚恩のものといりてさるとあふんと耳ふたも聞入ハ光秀ハ先蒐のもの卵の上刻をり四糸西洞院ある本能寺の門前ハいたり光秀西國出陣の装を上覽し入奉らんハ為

馳参りての上へ此由中ささるひ門を開かれへ
と申けれハ守門の番衆目出度ゆとて門ハ文字を開き
けりと云也

明智左馬助光俊馬かけをえつれくと采配を取てさし
秘けハ三千余騎一度よつと関を作て我先おとこ入
り中あも船本ハ之丞太刀を抜く真一文字おと入を
とて蘭地甚九郎三宅孫十郎おとるへさやと云さぬ先を
横切く責入さり是等お先をわけられて木村次郎右衛門
並河金右衛門中村次郎兵衛おとれ一と一所さくむを
見て村井又兵衛も同く繼くを待と聲をわけ四方田又
兵衛三尺あまりの鎗引さけてわけ入たり信長御覽一奴

原を一人も餘さぬ射く呉るやと宣ふまに矢繼そや
引取く射玉小ふより矢表ふとこ一者七八人えらくと
射たをさぬれハ夜ハあけ川正しく右大臣とのと見奉り
ふからさぬれハ昨日追御所様の上様のと恐怖中せし御
有様いゆくへ鎗を付へさとためらふ処へ射る矢ハあら
れ日頃の妙手ふまにまとは一矢ふ二人ハ射らる共虚
矢ハ更は無さけりかふ処へ御腕のかたより屋代勝之
助と名乗る切く出三宅孫十郎といど三戦ふ其うしるよ
り伴太郎左衛門と名乗を聞蘭地甚九郎ふし参りゆと
いふより早く鎗を合は伴正林同吉五心を一川と徳先を
そろへく切い川をハ四方田又兵衛こにあり向ら待と

をいやといふまゝに二人を相手に突合たり太郎左衛門
ハ甚九郎不討を正林吉五勝之助いづれも能戦ひ一足も
引取おふ一枕不討をけり蘭丸ハ前不顯を後ふさ、え
飛鳥の如く働さふから聲をのけさハ味方をいさめける
ふよりハ中間の藤九郎藤八岩石新六彦一弥六熊若ふと
いふもの共火水ふりてふるまひけり又兎小性の力丸
坊丸をのく得ものを取さよくそたらさしめを討きと
小川愛平金森義入魚住勝七今川孫次郎狩野又九郎薄田
與五郎落合與八郎真一くら不繼ささり御小性の伊藤彦
作又、利龜松山田弥太郎飯河宮松丸種田忠兵衛龜原鍋
丸祖父江孫丸大塚弥三御馬廻りの犬塚又十郎平尾平助

針川弥市年來の御恩ハ此時ふりといふまゝに走馬か
まくだ、かへハ寄手多一といへともや、もをれハ突ま
けて御殿の上へ寄つけ左馬助光俊これを見、鞍かさ
に立上り敵多一とも此寺内かきりありをさあらるふ
打そろふと切入や御大將は鎧をつけよさけり人手あ
りら一と引入て御自害もやあらんらん御大將を追こ
めハいづれも自滅をへき、林半四郎よく傳へよと下知
をれハ承そりぬといふまゝに門より内へおめいて入進
めや人くゆれや若もの共とよはをれハ浮足あありつる
もの共まささりかへ一信長公を目あかけてきたれ合ハ
薄手二三ヶ所負を多ひ白き單ハ紅のもさりるるり

大関記六編卷之十二

見えに多し小倉松壽丸湯淺甚助中尾源太郎ハ外ニ旅宿
して居たりハこの由聞と其俣寄手にまきまき寺内へ
かけ入面ニ小名乗かけゆ寄手と戦ふ蘭丸是をきて見
事にハ人ニや今日と限りの命なり一人あり共御敵を亡
か玉へといさめられ何のいちもためらふへき踏こ
こく戦ひて敵大勢うち取て我身も終りうされけり臺所
口ハ高橋席松ここ入大勢追かへ一登さほ横さぬ十文
字ふそ一里かりて戦ひつこにて敵十七八騎切ふせ
ハかとも鎌鎗を右の腕まかけられ其まきそに倒る
を起しも立尻首をとらる虎松うたれき臺所の口ハさて
破るにより敵大勢ここ入けりされとも御所ハいさる

矢たをぬときておしまた一弓手右手おしもぢり見あけ
見おろし五段射の秘事をつくりて射あへハ寄手おとく
もさあすいゆそのへきとも見えさむけり光秀の勢を
暑氣またへハ西洞院のあわれまおりて水をのむとい
へり

陰徳太平記ハ光秀所領丹波三十六万石近江佐和山志
賀郡小て十八万石をへて五十四万石といハ五十四万
石小て一萬乃軍兵を起し是五十石一騎の法なり何の
侯家おや五十石より馬一疋と定めらるくと聞て是誠
田殿の軍役と云へられとハ實ハ光秀の法と知へり

重修真書太閤記六編卷之十七終

重修真書太閤記六編卷之十八

四方田又兵衛力丸を討事

并いふま稻次万五郎下知を傳ふ事

寄手の大將明智左馬助光俊時刻う川らハ事の變起るへ
 一時責ませめ破らんと馬を乘廻し總門の前を駈を名
 て光俊らにあり働の甲乙はふさみ見へたり臆る形
 人よよきたるびれる面々信長公とて鬼神ふいあらに
 放ち多御矢をやしと五本一本一を形をよひる形
 れを先蒐後鋒よりひの毛あてよく見へたり一足も引る
 切れくさ采配を以てさし申ぬけい今更てをられ見

え一人も氣を取直し進みゆく實は兵士を遣ふ鷹を遣ふも同一とや並河金右衛門木村次郎右衛門中村次郎兵衛の三人一所は居たりけるに村井又兵衛の二間を越たて切戸あてやありけん二間をわりの戸を揃えて息繼居たゞけるか三人の顔を見るとひとひと後まひりひ鑑のおと一げよく見ゆふと記録を頼み大將軍といひあから持たる切戸を投て信長公を目あけ先登ハ村井又兵衛ぞといひきて小躍して進みけり木村次郎右衛門はとわけぬ邊ハ先登を心掛玉へ我等ハ信長公の御志を賜るを見よと押並あつと見れハ木村をせぬけし真先進む並河中村是を見て

禮儀を知ぬものあつた無益なりいさや御前へ進みより村井木村ハ鼻あかせんと虎口をかへて働さけるを蘭丸見るより大に怒り憎き下郎の云余はあつた退くと聲あらけ十文字の鎗をさうくと打り立ちむふ弟の坊丸カカをい來り兄をおしけ大太刀うちあり左右へ切あひけ立たるを金剛力士やあやまる斯と見るより薄田與五郎金森義入大塚又市寺尾平助魚住勝七小川愛平湯淺甚助落合小八郎山田弥太郎今川孫平次やさしき入りのありさるや後をくらめやと聲々あふのりわけ多く敵をほろりけり寄手ハ多勢を頼みて入替くあけるうへ例の四人をひとまをもせは御所

大開言六編卷之十一
を目め掛切て入是は繼くハ誰れを四方田又兵衛舟木
八之丞三宅孫十郎蘭地甚九郎進士六郎大夫等をえ一め
大將あれは扣えぬ面日頃の武功まさき志々かお持正
一き浄玻璃の鏡ふり川をわけあれや命をかきりあき祀
やされ進めやまめとえけ三あひおとら一まけ一と切
けたりけ左馬助光俊あをも戦士をまめんと林半四
郎石川佗助有澤兵八三人を軍の目付と定め一ハハ川
まも寺中へえ一入面働きの證入と大將のゆる一給
ふ所也日頃の言葉を真まをるも又偽とされんも今日あ
れやもめやくとせり立られつれも何とて引へき持と
息をもつろと以寄されハもや御所のま一由は中庭の楨

の木よて持攻入る蘭丸斯と見るよりおち口惜御座へ
間近敵を入たる持やえや追かへせと飛鳥のおとけり
如く駈來り眼は電光聲わかき船り大床をさうくと踏と
とろか一と戦ふを見るよりえせ寄四方田又兵衛その十
文字を森の蘭丸願ふかさきと川とよりてそれ立せお
あも森の蘭丸これハ明智ウ侍ハ四方田又兵衛と呼そ
れハ蘭丸さ川と眼を付て慮外ものめといふよりそやく
操いさは十文字の鎗をそ川一てかひ多く進むを力丸
そやくも見付下郎めえされと聲かけて三尺二寸の太刀
を以て拂ひつ薙川戦ふたり折しも聞ふる時の聲御所の
ま一はる小書院へ敵の入りとねもそれ一ハ蘭丸こ

をハ打てて小書院さしてそ一里行力丸ハ志そ一爰まで
支那ハ御所へハ敵のおそかさんと思ふ心をちからあき
ふミ込く太刀先より火を散りて切むる四方田ハ蘭
丸を討損しハ腹たしけれと力丸とそ森の連枝脱
さし遣しとたくさかけ暫時うり闘ひしハいかに仕け
ん躰いてちと俯ふしある処を得たりと又兵衛踏こそ
てついで突ふせ首をとる是ハ蘭丸弟あり今年十六歳
三左衛門可成の四男なり兄の坊丸これを見て透間もあ
く駈よせて汝ハ明智ハ郎等よる公の御敵あるのそ恥ら
し目前よてい弟のかたるのがはまどと突つくる又兵衛
さつとろりあふのささゆふを森の坊丸よる参ゆと聲か

けて進むを後陣の大勢かそやくも見付又兵衛討せてか
あまよし續けくとせめ寄て秋の野もと不似たるそよね
く薄の乱る如く穂ささるるとく操いしは鎗をいさめ
かきとせ以上段下段も切えらひく戦ひしハとも今朝よ
里の軍ハ坊丸ハあれふたり終はあに討れよる是れ
蘭丸弟に今年十七歳木村村井四方田の三人ハ防
く兵士切えらひ打えらひかけぬけ三人ひらりと落椽
へ飛上り村井又兵衛先登そと名乗ハ織田殿とつと御覽
一推参なり忤め罷退け我を誰と見見る右大臣信長也
と叱りあし御目の光ハ電御聲ハ獅子の吼るおさよ似た
り二人もさし進まねむ処を見おされ彼大弓あ

大矢を番ひかふる放し又切て放とせり鏃もあたり
村井又兵衛生死の知を掾より下へどおと落木村次郎右衛
門ハ是を見て太刀を抜持かけしを信長見ゆひ弓取直
し肩先をえつと打ぬへい氣をりしふは是も同じく掾
より下へ落たりけり木村の元來丹波國栗田郡山本村の
生れあて氏も種姓も定かあらは弓あき撃れ一疵をいた
と軍場を引退き山本村へ立歸り保養されとも傷も和を
日増し疵はえれあかき七日目も終りあえぬく果みけり
信長公ハ矢種のあるかきり引とく射ぬへい寄手射
しらまされ進まぬて見えける処へ明智侍も安田作
兵衛類を以て友とほむ習ふれハ作兵衛り友箕浦大内藏

古川九兵衛といふものあり共光秀り旗本も居たりけ
るかあまりに軍の間いり如何ある故と思ひしかば左
馬助り手へせ来て某一軍仕らん御覽ゆへと門より内
へ駈入るところへ光秀が母衣のもの稲次万五郎かけ來て
大將軍の御意ハ安田ハいり後れ一を早攻入て手柄せ
よ首ハ一門を多く斬とりそを仰られしと云ハ作兵衛ふ
りかへり畏れ只今その首實檢入中へしと申てて寺
内へえし入箕浦も古川も少もおくれを川ひたり稲
次もせ歸り作兵衛が角やていと云ハ光秀莞尔と笑ひ吉
左右おえしと待おけり安田作兵衛大勢をまし鎧つき
して躍かくれハ御所方おても去ものと見て我打取んと

大内言一編卷之十一

四

せで合あひまく進まむを見みて安田作兵衛打笑うちわらひ運うかたふきて
 只今滅きひまふ信長公の為ためよをつる命いのちハおしかくをや早はや
 く味方あふ降参くだりま一日いちにちの出いでの武將ぶしょうお従したがへよやと叫こひさけん
 と戦たたへハ御所方ごしょかた多く亡あひけり丹波侍たんばざむらい山本三郎右衛門と
 云いもの何なにり安田と同一どういく進まさけるが寺内の軍つぐまハ大事だいじ形かたち
 大將日頃たいしょうひころの思おものためため命いのちハ今日けふあを棄すへれとおもひ
 切きて亂みだれあふ

明智方四人の勇士討入事

并蘭丸諫言の事

爰こゝ山本三郎右衛門ハ二人を駈かけ抜ぬき一人の功こうを立たてや
 とおもひつめ二間壹尺一寸の十文字鑓やぎを肩かたおかけ中門ちゅうもん

の左へままれハ堀一重向ほりいっしゅうむかの塀へいハさのさ高たかかく後のち傍そばよ立た
 たる足輕あしき又また聲こゑをかけ其方そのかたあらえ立た堪たえよと云いふと見みれ
 ハ鑓やぎを左ひだりカ杖かづつえとしその足輕あしきの肩かたみ手てをくけてえいや
 と云いふ一いっそねえぬれハ塀へいの上うへ著きたる具足ぐそくを小櫻こさくらおとし
 大袖おほそで小袖こそで草摺くさすりまて舞まひるがへつて蝶鳥てうとうの狂くるふよ似にたり
 あく飛とたりや飛とりやと志こゝろぞしあらうもやまさり寄よせ
 手三千余騎山本てさんよふきやまもとの越こるを正ただしく見みるを形かたちれる我われをと
 らしと塀へいお上ありさてお持もち寺内てらうちよここ入いらんあれ右大臣みぎのわらわ
 との矢種やたねのかきりと射やささむへハ前まへよまくこ寄よせ手屏てびん
 風かぜをたをたぬぬかくたふれぬ安田やすだをいつれを廻まわりけん
 右大臣殿みぎのわらわのどののおおえしまはり御所ごしょとそのあえひ無な下くだよ近ちか

くありーかは鑓を取進之ゆく箕浦古川おー並ひ作兵衛
衛いつくより入しそと聲をあくれハからくとりちさら
ひ軍の庭の早道ハ我より外またれあハ志らんと云え二
人も打笑ひ左をさせまーとおー並ふ作兵衛ハ右大臣殿
と相近はる明智日向守光秀ハ深く頼まれー安田作兵衛
國次めていと云を目あまよ只一矢射出ーあふを作兵衛鑓
あてうち落をいらつ二の矢を射多へハあやまよ及安
田ハ臂の切くをくさと射るされ共薄手ふれハとくも
せはまるとさ鎗の穂さきをまめけるを射おとー呉んと
引こめ給ふ弓の弦えつーと揚れハそく高く弓ハ戻りて
見えにたり右大臣殿御聲高く替弓をめさとまへハ菅谷

藤八御弓あれよとさー出に其間ハ安田をとり上り鑓
を志どひくり出に右大臣殿鑓をくと宣ふを近習の面
面立ふきつり何もあれハ上様へ鑓を流けんとえたら
くぞ微塵あふして呉んせと横合より突さくえたり折
も奥より一人の女房鎌十文字のさやををりて奉る信
長これを御覽して堀川夜うちの静あふるまひをねハむ
りーのもの語アあ川をれ今の心掛容ハ優形ハ心を剛
類すれあふるまひやさはる間鍋の六郎大夫ハ妹よと
御聲高く褒ふ明智方の軍兵とも女武者とハめりら
や我打とらんと近川くを女ハ二重あたをさをわけ紅梅
練の鉢巻ー長刀を水車あまはして走里わくる通りを

の帷子の裾もならくをけしき働手の下は十四五人の討
れたり山本三郎右衛門是を見と國ハ同一丹波も今ハ
敵のとあれハ女ともいへのめをましと十字の鏝取直
一突るを死女もろくろへ長刀あて鎗をまき落さんと
けら難川手を推ひて戦ふたりともそれを山本ハ請太
刀よのそありけるを女を強力を得てふとあましく掛本
を誰射たりけん流矢さつて左の肩また川女ハ手負川
今もこれまて人手あつらと御殿の奥へ走り入九寸
五分を胸にあま貫ぬりれて死たりたり右大臣殿ハ
長谷川宗仁を召れ何あ宗仁うけおれ信長ハ最期ハ女
を泣れといえぬさい末代あけて耻辱こそやく彼等を

落しやれと宣ふまの彼女房たちを引まとお寄手をあさむ
き遁れけり是ハ羽柴筑前守とかれ約せとあれハ也
かり後ハ信長公今ハ心をと鎗を取て突廻し獅
子奮迅の勢をふ虎乱入豹馴飛突てハかけかけハ突
一進一退鏝聲かれ眼光いるか如く古今まれある猛將
の最期の軍をささす右大臣殿御年四十九膂力をを
盛あまませは寄手左右ねく近付得たかくさ此軍の
つえつへとも見えたり只寄てハかへかへてハ
寄るそかりの其内ハ時刻うりてかあると安田作兵
衛はくさうり既あかうよと見へ一時森蘭丸馳來り千鈞
の弩ハ鬩嵐の為ハ發たはそやく引入提えしてかね

大開已六編六十一

その御用意ゆゑ、やと言ひ終らば安田に向て鎧を合は
右大臣殿ハ打笑せせむひあまふ敵の討まよふおも
しろさふ汝ウヤせし事を御忘れありしぞや更ハ心し
あふ腹切ん志えしは、えて雑人ともを近づくるゑと仰
られ障子引たて入るゑ安田作兵衛のかしやと蘭
丸をうちて、右大臣殿まつけむうひ御あげいともし
はく迄か逃し奉るへき拙劣き御振舞や返しあれと聲
をわかれハ憎き奴のもの、いひ様や其方ともおおそれ
て逃る法やある蘭丸わかくてあらんかきり其方あとを
御前へ出しやへきやと縦横無碍ハ突出た鎧の穂先の
ほどさに安田もとかくもてあまし爰まで支えらるゑ其

内は右大臣殿をうちもらし奉りてハ残念ありと見や
向ふの障子の影残燈は照されてまきれぬし嬉しや今ハ
退し参らせしと躍りて、是て投はさふ突ハ手あたへた
しあふ障子引あけは、あるしをあげそやと進むをやらし
と蘭丸ハ突し文字の鎧先をわらむ素鎧の早業と一交も
せに戦ふたり蘭丸其日の出たちハ栗梅の越後布ハ鶴の
丸を白上りふ大小ちらし紅梅練の大口のそを高く取て
三尺をわりの刀をさし生年十八歳色白くして長たし
安田ハ黒草の胴子袖の肩草摺白草ふて兜の鞆ハ紅の糸
もてをわげぬおとしたり三尺二寸の大刀一尺八寸の小
かよ二尺計の太身の素やり追つたへし竹龍と席互子を

きをうかんと雲立おろへハ風つよく敵味方の目を驚り
一表そらく爰に支えたり

紀伊國高野山ハ峯高く聳えて里とをく寺家豊饒ふ
て浪人の隠れをむへき便宜より信長是を亡さんと思
召討手數万余騎七口より押寄せ、かこの山と峯と
ふ付城をかまへ糧道を断る攻ける不と學寮行人等
衆議をらく日本東西の猛將銳士いつれも信長の為
身を亡國を失ふ増々僧徒の身ふ於て争てか矢石の
功をふさん所詮ハ佛神の加護を得るあらて安全の地
に住りかたとして有驗の老僧とも一室もとちこもり
て咒咀調伏の法を修り肝膽を碎て祈りける第七日ハ

満ちるハ六月朔日ありとく

又信長仰られ々々ハ本願寺顯如上人大坂城を退去し
川をとも教如跡よのこりて籠城の企よ及ひしと顯如
知さる正ハあらし早く打滅し邪法の根源をたつへ
と云とも勅定よ依て一旦和睦せしを今更此方より破
るへきにあらけ川諸國の門徒蜂起の恐をふきふし
も非は四國征伐の序ハ神戸三七郎を大將として一万
五千餘騎岸和田を本陣とし濱の手山口越と陣を
張を近郷の門徒とも不審しやめて鷺の森に注進せし
かハ上人鷺の森を退去あまて和歌山よのり紀の関
守よ下知し小野山の峠よ荒垣をゆをせ誓えり紀路の

山へ浦へかけ人を居り守らせ門徒の僧徒ハ云ふ及そ
 以檀越の老若寄集り寄來る敵を待居たり一六月三
 日の早朝神戸殿の先鋒鷲の森へおしよと合戦ける
 小門徒手いたく働さけるふより寄手数數十町の外まで
 引たりけはは謀まやあらんとて追かけせは門徒ハ
 一息ついと敵まゝ寄來らハと氣を以め待居たりけ
 るふ已刻をかりに寄手取ものも取あへは大坂さして
 引退くこれハ門徒を欺く謀あらんと跡を慕ふとせ
 ちりけるは其日の晩方にハを京都の大變を注進表
 たりけりと陰徳太平記に見ゆ本篇と脚異同あり
 家忠日記ハ五月廿六日光秀坂本より龜山へ入廿七日

愛宕山上り西坊小宿一廿八日祈願より連歌を興行
 一其日龜山へ飯り一と云廿九日信長近習百五六十人
 小て入浴一本能寺に入濱松おてハ今日堺小著御六月
 一日光秀明智左馬助齋藤内藏助溝尾勝兵衛等小隱謀
 を告二日未明小本能寺をかこむと云

大隱言六終卷之十八

重修真書太閣記六篇卷之十八終

